

## 陸游の詩におけるロマン主義的要素

朱 東 潤 著  
三 野 豊 浩 訳

### 〔解題〕

- 本稿は、朱東潤（二八九六～一九八八）の『陸游研究』（一九六一年九月、中華書局）所収の論文「陸游詩中の浪漫主義成分」の翻訳である。
- 原文には注はないが、本文中に引用された陸游の詩の製作時期その他を、末尾に補注として記した。製作時期は、すべて錢仲聯『劍南詩稿校注』（一九八五年九月、上海古籍出版社 注では『校注』と略記）による。
- 引用される詩文はすべて新字体とし、訓読・ふりがなは新仮名遣いとした。
- なお、朱東潤氏の研究は、抗日戦争期の民族意識が極度に高揚していた時期を背景としている。そのため、今日的には不穏当な表現が時に見られるが、研究の客観性を尊重する意味で、そのまま訳出した。

唐代の二大詩人である李白（七〇一～七六二）と杜甫（七一二～七七〇）は、宋代において同様に当時の人々の尊敬を得ていた。李白はロマン主義の伝統を代表し、杜甫は現実主義の伝統を代表する。陸游（一一二五～一二二〇）は、中年以降は現実主義的な傾向がより鮮明になるが、若い頃にはロマン主義の道を歩いたことがあり、当時の詩の中にはまだロマン主義的な作品がいくらか残されている。この状況は、中年まで持続される。晩年以降は、詩の中で時たま勝利の凱歌が奏でられる以外には、ロマン主義的な傾向が見られることは、ごく少なくなる。宋の羅大経の『鶴林玉露』は、宋の孝宗（趙昀）がある日周必大と話をしている、「現代の詩人の中で、誰か唐の李白に比べられるような者がいるだろうか」と尋ねたところ、周必大が、「ただ陸游あるのみです」と答えたことを記している。それゆえ当時の人々は、陸游を「小李白」と呼んだ。「小李白」

と呼ばれたのは、陸游の若い頃には、この呼び方が彼の詩の発  
展状況と合致していたからに違いない。陸游は晩年には、詩の  
中のロマン主義的な傾向が減少したのみならず、李白に対する  
見方も変化し、李白は見識がひどく浅いと考えるようになった  
ことが、彼の書いた『老学庵筆記』巻六に見える。<sup>(2)</sup>  
淳熙元年（一一七四）、陸游五十歳の時に、成都〔四川省〕で  
「池上の醉歌」詩が書かれている。これは、李白に大変よく似  
た作品である。

我欲築化人中天之台

我は欲す 化人中天〔仙人が天に昇  
る〕の台を築き

下視四海皆飛埃 下のかた四海の皆な飛埃のごときを視  
んことを

又欲造方士入海之舟 又た欲す 方士入海の舟を造り

破浪万里求蓬萊 浪を破ること万里 蓬萊〔伝説の仙  
山〕を求めんことを

取日挂向扶桑枝 日を取りて扶桑〔東海の中にある神  
木〕の枝に掛け

留春挽回北斗魁 春を留めて北斗の魁〔ひしやく〕を挽  
回せん〔引き戻そう〕

横笛三尺作龍吟 横笛 三尺 龍吟を作し〔龍のうそ

ぶくような音を出し〕

腰鼓百面声転雷 腰鼓 百面 声 雷を転ずるがごとし  
飲むこと長鯨のごとく 海も竭く〔水  
がなくなる〕べし

玉山不倒高崔嵬 玉山倒れず 高きこと崔嵬たり〔け  
わしい〕

半酣脱幘髮尚緑 半酣〔酒宴がたけなわの時〕幘〔頭巾〕  
を脱げば 髮 尚お緑〔黒髪〕なり

壮心未肯成低摧 壮心 未だ低摧と成る〔減退する〕を  
肯んぜず

我妓今朝如花月 我が妓 今朝 花月のごときも

古人白骨生蒼苔 古人の白骨 蒼苔を生ず  
後 当に今を視ること 古を視るがご  
とくなるべし

对酒惜醉何為哉 酒に対して酔を惜しまば 何をか為さ  
んや

〔『劍南詩稿』巻四 以下『詩稿』と略記〕

『詩稿』巻十三の「醉眠の曲」<sup>(4)</sup>詩は、この詩と同一の類型に  
属する。主題は飲酒で、酒宴がたけなわ時に人生の無常をよ  
り一層感じるもので、人生の苦悩を解決するには、ただ痛飲する  
ほかはない、と詠うものである。

「池上の醉歌」詩と同じ年に、陸游は「神君の歌」<sup>(5)</sup>詩を書い

ている。その中では神君（道教の神）の出現が描写されていて、李白の「夢に天姥に遊ぶの吟 留別」詩に大変よく似ている。

泰山可為礪

泰山〔山東省の山〕礪〔砥石〕と為すべく

東海可揚塵

東海 塵を揚ぐべし

惟有壯士志

惟だ壯士の志のみ有り

死生要一伸

死生 一たび伸びんことを要む

我夢神君自天下

我 神君の天より下るを夢みるに

威儀突突難具陳

威儀 突突として〔大変立派で〕具さに陳べ難し

飛龍駕車不用馬

飛龍 車に駕して 馬を用いず

呵前殿後皆鬼神

前に呵り 後に殿するは 皆な鬼神なり

奇形詭狀

奇形 詭狀〔奇怪な姿〕にして

密如魚鱗

密なること魚鱗のごとし

猘猘齟齬

猘猘 齟齬として〔群れ集まり起伏をなして〕

争扶車輪

争いて車輪を扶く

黑纛白旄

黑纛〔黒い大旗〕白旄〔白牛の尾をつけた旗〕

其来無垠

其の来たるや垠無く

黄霧紫氛

黄霧 紫氛〔黄色や紫の霧〕

合散輪囷

合散すること輪囷たり〔曲がりくねっている〕

考録魑魅

魑魅〔怪物〕を考録して〔取り調べて〕

号呼吟呻

号呼吟呻せしめ〔叫び声やうなり声をあげさせ〕

約束蛟螭

蛟螭〔みずち〕を約束して〔縛り上げて〕

天矯服馴

天矯服馴せしむ〔折り曲げて従わせる〕

後車百両載美人

後車 百両 美人を載せ

巾褙鮮麗工笑顰

巾褙〔頭巾と一重の服〕鮮麗にして〔色鮮やかに美しく〕 工に笑顰す〔笑つたり顔をしかめたりする〕

金尊翠杓溢芳醇

金尊〔金の酒樽〕翠杓〔翡翠のひしやく〕 芳醇〔かぐわしい美酒〕 溢れ

琵琶箜篌飾怪珍

琵琶 箜篌〔楽器の名〕 怪珍〔めずらしい御馳走〕を飾る

世間局促常悲辛

世間 局促にして〔せま苦しくて〕 常に悲辛するに

神君飲樂千万春

神君の飲樂 千万春なり

嗚呼

生不封侯死廟食

生きては侯に封ぜられず 死しては廟食せられず〔靈廟にまつられない〕

丈夫豈得抱志長黙黙

丈夫 豈に志を抱きて長く黙黙たるを得んや

(『詩稿』巻五)

この詩は「天姥の吟」詩によく似ているが、完全に同じというわけではない。「天姥の吟」詩は比較的複雑で、作者は第一の夢の世界から第二の夢の世界へと入って行き、後の夢は前の夢よりも一層深いものになっている。その後で夢の世界から出て来る際にも、二回の目覚めを経て、ようやく現実の世界に戻って来るのである。最後の五句は次の通りで、依然としてロマン主義な傾向を十二分に有している。

別君去兮何時還

君に別れて去かば 何れの時にか還らん

且放白鹿青崖間

且く白鹿を放つ 青崖の間

須行即騎朝名山

須らく行くべくんば 即ち騎して名山に朝せん

安能摧眉折腰事權貴

安んぞ能く眉を摧き腰を折りて 權貴

〔身分の高い権力者〕に事え

使我不得開心顏

我をして心顔を開くを得ざらしめんや

しかし、陸游の「神君の歌」詩は、これとは異なる。たとえ夢の世界を「奇形詭状にして、密なること魚鱗のごとし。鰓鰓獸齧として、争いて車輪を扶く」という風に幻想的に描写している、「天姥の吟」詩の

虎鼓瑟兮鸞回車

虎は瑟〔楽器の名〕を鼓し 鸞〔鳳凰の一種〕は車を回らす

仙人兮列如麻

仙人 列して麻のごとし

とほとんど違わないとしても、やはり異なっている。「泰山礪と為すべく、東海塵を揚ぐべし。惟だ壯士の志のみ有り、死生一伸を要む」と、「嗚呼、生きては侯に封ぜられず 死しては廟食せられず、丈夫 豈に志を抱きて長く黙黙たるを得んや」は、完全に陸游の現実主義の主導的思想と結びついている。陸游はこの詩において李白を学んだのだが、依然として自己の本来の特色を露わにしているのである。

「神君歌」詩と似た作品には、また『詩稿』巻十六の「安期篇」<sup>(7)</sup>「崑崙行」詩と、巻三十二の「五月二十三夜 夢を記す」詩<sup>(9)</sup>がある。

陸游の二首の「春愁の曲」詩も、ロマン的な傾向を帯びた作品である。

春愁の曲 客 成都を話し、戯れに作る<sup>(10)</sup>

慮義至今三十余万歳

慮義〔上古の帝王〕今に至るまで三十

余万歳

春愁歳歳常相似

春愁 歳歳 常に相似たり

外大瀛海環九州

外大瀛海〔中国の外側を取り巻くとき  
れた大海〕九州〔中国〕を環るも

無有一洲無此愁

一洲として此の愁い無きこと有る無し

我願無愁但歡樂

我は願う 愁い無く 但だ歡樂し

朱顔緑鬢常如昨

朱顔〔血色のよい顔〕緑鬢〔黒髪〕  
常に昨のごとくならんことを

金丹九転徒可聞

金丹〔不老不死の仙薬〕九転 徒らに  
聞くべく

玉兔千年空擣藥

玉兔〔月のうさぎ〕千年 空しく薬  
を擣く

蜀姫双鬢姪姪嬌

蜀姫 双鬢〔二つのまげ〕姪姪とし  
て嬌なり〔なまめかしく美しい〕

醉看恐是海棠妖

酔いて看るに 恐らくは是れ海棠の妖

世間無処無愁到

世間 処として愁いの到る無きこと無  
きに

底事難過万里橋

底事ぞ 万里橋〔成都にある橋〕を過

〔『詩稿』巻四〕

ぎ難き

後の春愁の曲 並びに序<sup>(11)</sup>

予 成都に在りて春愁の曲を作り、頗る人の伝うる所  
と為る。偶たま旧稿を見て悵然として感有り、後の春  
愁の曲を作る。

六年成都擅豪華

六年 成都にて 豪華を擅にし

黄金買断城中花

黄金もて買断す〔買い占める〕城中の  
花

醉狂戲作春愁曲

醉狂 戯れに作る 春愁の曲

素屏紈扇伝千家

素屏〔白絹の屏風〕紈扇〔白い練り絹  
の扇〕千家に伝う

当时説愁如夢寐

当时 愁いを説くこと夢寐〔眠つて夢  
を見る〕のごとし

眼底何曾有愁事

眼底 何ぞ曾て愁事有らん

朱顔忽去白髮生

朱顔 忽ち去りて 白髮 生じ

真堕愁城出無計

真に愁城に堕ちて 出するに計無し

世間万事元悠悠

世間の万事 元より悠悠

此生长短帰山丘

此の生 長短となく 山丘に帰らん

閉門堅坐愈生愁

門を閉じて堅坐すれば 愈いよ愁いを

未死且復秉燭游 生ず  
未だ死せず 且く復た燭を乗りて遊ば

（『詩稿』巻十五）

「前曲」が書かれたのは、乾道九年（一一七三）の年末、陸游四十九歳のことである。当時陸游は任地の嘉州（四川省）にいて、実際には成都にはいなかったが、蜀州（四川省）に転任を命じられたために、離任の準備をしている所だった。「前曲」の小注の「客 成都を話す」は、主人と客人がどちらも成都にはいないことをはつきり物語っている。それゆえ、後曲の小序「予 成都に在り」の「在」の字は、幾分幅を持たせて考えなければならぬ。「後曲」の創作は、淳熙十年（一一八三）、陸游五十九歳、山陰（浙江省）でのことである。二曲の創作は、完全に異なる精神状態の中で行われたのである。「前曲」が書き上げられた時、陸游はちょうど嘉州在任中で、南鄭（陝西省）の前線を離れて一年に満たず、まだ「あと一歩で成功を逃した」といった思いを抱いていたので、悲憤が心に満ちあふれていた。同時に、またいくつかの要素が存在する。一つには、当時詩人はまだ年齢が五十歳未満で、それほど高齢というわけではなかったこと。二つには、当時の社会においては、私生活に対する要求は現代の厳肅さに遠く及ばなかったこと。三つには、陸游には多少なりとも「風流太守」という発想があったことで

ある。多様な条件が総合されたことよって、この詩が完成されたのである。「蜀姫」は妓女を指し、この詩からも、成都における陸游の私生活が奔放なものであり、彼が美酒と女性に陶酔を求めたことが知られる。彼の「愁」は、実際にはさほど深刻なものではなかったのである。こうした状況を、彼は「後曲」の中で「当時愁いを説くこと夢寐のごとし、眼底に何ぞ曾て愁事有らん」と、はつきり指摘している。「後曲」が創作された時には、生活は完全に異なるものになっており、詩人は年老い、生活も比較的厳肅で、愁いは「真に愁城に墮ちて出ずるに計無し」という有り様だったのだが、「未だ死せず 且く復た燭を乗りて遊ばん」の一句は、また愁いを解きほぐす道すじを示している。

ロマン主義的な作者は一種の幻想を提示し、幻想の中で願望の実現を追求する。それゆえ積極的なロマン主義は、現実主義と結びつくのである。陸游の作品において、この点を具体的に指摘することができる。慶元三年（一一九七）、陸游七十三歳、故郷の山陰に隠居していた時に、「志を書す」詩一首が書かれている。

往年出都門 往年 都門を出でしとき  
誓墓志已決 （父母の）墓に誓いて（隠退の）志 已に

決す

況今蒲柳姿 況んや今 蒲柳（衰弱したさま）の姿

俛仰及大耋

俛仰〔わずかの間に〕大耋〔八十歳の高齡〕に及べるをや

〔『詩稿』卷三十五〕

妻孥厭寒餓

妻孥〔妻子〕寒餓〔寒さと飢え〕を厭い

隣里笑迂拙

隣里 迂拙〔世渡りべた〕を笑う

悲歌行拾穗

悲歌 行ゆく穗を拾い

幽憤臥齧雪

幽憤 臥して雪を齧る

千歲埋松根

千歲 松根に埋もれ

陰風蕩空穴

陰風〔陰気な風〕空穴〔空っぽの洞窟〕に蕩く

肝心独不化

肝心〔肝臓と心臓〕独り化せず

凝結變金鉄

凝結して金鉄に變ず

鑄為上方劍

鑄て上方の劍〔天子の使う宝劍〕と為し

鬻以佞臣血

鬻る〔いけにえの血を器に塗って神をまつる〕に佞臣の血を以てす

匣藏武庫中

武庫〔武器庫〕の中に匣藏し〔箱に入れて取藏し〕

出参髦頭列

出だして髦頭〔先駆けの騎兵隊〕の列に参す

三尺粲星辰

三尺 星辰 粲たり〔燦然と輝く〕

万里静妖孽

万里 妖孽〔わざわい〕を静む

君看此神奇

君 看よ 此の神奇

醜虜何足滅

醜虜〔みにくいえびす〕何ぞ滅するに足らん

炎火熾崑岡

炎火 崑岡〔崑崙山〕に熾んなれども

(7)

美玉不受焚

美玉 焚を受けず〔焼き滅ばされない〕

蘭碎作香塵

蘭は碎かれて香塵〔香りのよい塵〕と作り

竹裂成直紋

竹は裂かれて直紋〔まっすぐな模様〕と成る

これは、現実主義とロマン主義を結びつけた作品である。最初の八句は、もう二度と役人にはならないと決意したものの、生活は困窮し、悲憤慷慨していることを詠う。中間の四句は、自分が死んだ後で、松の木の下に埋められ、陰気な風が激しく吹き、内臓が凝り固まって鉄になることを詠う。最後の八句は、それを鑄造して天子の使う宝劍とし、星星と同様に燦然と輝き、それを用いて万里の彼方の仇敵を掃討することを詠う。南鄭から呼び戻されたことは、陸游にとつて大きな痛手だった。この時の痛手について、彼は各種の芸術的な手法を用いて、心の中の悲しみを伝えようと試みている。「春愁の曲」の書き方はその一種であり、美酒と女性に陶酔を求めるところを詠うことで、内心の悲憤を表現しているのである。時には、陸游は自分の思いを率直に提示している。彼が乾道九年に書いた「懐いを言う」詩〔『詩稿』卷四〕はそうした作品であり、その冒頭は、次のように詠っている。

彼は、自分はさまざまな苦しみを経験して来たが、その本質は変わらないことを提示している。以下に、さらに続けて次のように詠っている。

捐軀誠有地 軀を捐つるは誠に地有り  
賈勇先三軍 勇を賈いて三軍に先んず

陸游は、「自分に戦いの機会さえ与えてくれるならば、身は一兵卒に先んじ、生命を犠牲にしたい」と詠っている。このような戦死を願う精神は、詩歌の中にまれに見るものである。しかしこの詩の中では、ただそれを直接に提示しているだけであり、幻想に参加する要素はない。時には、彼は宮怨詩〔不遇をかこつ宮女の、無念の思いを詠う詩〕の形式を用いて、自分の思いを伝えている。これは古来詩人が常用する手法だが、陸游は自分の愛国的な思想をそれに結びつけ、純粹に個人の名利からは着想していないため、我々は彼に比較的高い評価を与えらるべきである。乾道九年に、そうした三首の詩——「長門怨」〔長信宮詞〕「銅雀の妓」〔詩〕が書かれている。これら三首は互いに連続して一ヶ所に編集されており、一つの思想的源泉から出ていることが明らかである。そのうち、「長門怨」詩を次に採録する。

寒風号有声 寒風 号びて声有り

寒日惨無暉 寒日 惨として暉無し  
空房不敢恨 空房 敢て恨まず  
但懷歲暮悲 但だ懷く 歲暮の悲しみ  
今年選後宮 今年 後宮を選ぶ  
連娟千蛾眉 連娟たり〔曲がついて細いさま〕千の蛾眉  
早知獲謹速 早く謹〔謹責〕を獲るの速やかなるを知ら

悔不承恩遲 悔ゆるくは恩を承くること遅からざりしを  
声当徹九天 声 当に九天〔天上〕に徹すべし  
淚当達九泉 淚 当に九泉〔地下〕に達すべし  
死猶復見思 死しては猶お復た思われん  
生当長棄捐 生きては当に長く棄捐せらるべし  
〔詩稿〕卷四

『詩稿』卷十七の「長門怨」〔詩〕と卷十九の「妾命薄」〔詩〕も、この一類に分類すべきだろう。「妾命薄」詩の末尾四句、

宮中雖無珠玉賜 宮中 珠玉の賜無しと雖も  
塞上不見煙塵飛 塞上〔辺境のとりでのあたり〕煙塵の飛ぶを見ず  
不須悲傷妾命薄 須いず 妾が命の薄きを悲傷するを  
命薄却教天下樂 命薄ければ 却つて天下をして楽しむ



しむ

は、自分の見解を正面から提示しており、人に陸游の面影を感じさせる。それがより一層はつきりと感じられるのは、彼の「婕妤怨」詩においてである。

妾昔初去家 隣里持車箱 共祝善事主 門戸望寵光 一入未央宮  
 顧盼偶非常 稚齒不慮患 傾身保專房 燕婉承恩沢  
 但言日月長 豈知辭玉陛 翩若葉隕霜 永巷雖放棄

妾 昔 初めて家を去りしとき  
 隣里 車箱を持す  
 共に祝す 善く主に事えんことを  
 門戸 寵光を望む  
 一たび未央宮〔漢代の宮殿の名〕に入る  
 や  
 顧盼〔目をかけること〕 偶たま常に非ず  
 稚齒〔年の若いこと〕にして患いを慮らず  
 身を傾けて専房〔寵愛を独占する〕を保つ  
 燕婉〔やすらかでしとやか〕として恩沢〔寵愛〕を承け  
 但だ言う「日月 長からん」と  
 豈に知らんや 玉陛を辞しては  
 翩として葉の霜に隕つるがごとくなるを  
 永巷〔漢代に罪を犯した宮女を幽閉した場所〕に放棄せらると雖も

猶慮重誘傷

猶お慮る 重ねて誘傷〔誹謗中傷〕せられんことを

悔不待宴時

悔ゆ 宴に待せざるの時

一夕称千觴

一夕 千觴〔千杯のさかずき〕を称せしことを

妾心剖如丹

妾の心 剖けば丹〔濃い赤色〕のごとく

妾骨朽亦香

妾の骨 朽ちるとも亦た香ばしからん

後身作羽林

後身 羽林〔近衛兵〕と作り

为国死封疆

国の為に封疆〔国境〕に死せん

〔『詩稿』卷十一）

この詩は、淳熙六年（一一七八）、陸游五十五歳の時に、任地の建安〔福建省〕で書かれたものである。——ある少女が後宮に入り、偶然に皇帝の寵愛を得て、このような生活がいつまでも続くだろうと思っていた。ところが、讒言が起こつて皇帝の心が変わり、少女はとうとう後宮の片隅に追放され、かくもつらい日々を過ごすことになった——陸游は、このような内容を詠っている。ここで陸游は、自分がかつては明るい希望に満ちた政治生活を送っていたが、絶え間なく攻撃を受け、ついには建安城にやつて来て、このような前途に希望の持てない官職に就いていることを、比喩的に表現しているのである。最後の四句は、「長門怨」詩などの数首とも異なっている。陸游はすみやかに幻想から抜け出し、次のように明言している。——自分

は、国家と人民に忠誠を尽くしたことを死ぬまで後悔することはない。ただ、死んだ後には一人の近衛兵となって、戦場で自分の生命を捧げたいと願うばかりだ——と。

『劍南詩稿』には、詩題の中で彼自身の夢の世界を提示している詩が百首余りある<sup>(18)</sup>。彼は彼の親しい人や恩師・友人を夢に見、以前行つたことのある現実の世界を夢に見、また空想の中の幻想の世界をも夢に見るが、より多く南鄭とその周辺を夢に見る。彼は夢の中で長安・潼関・華山・敷水に行き、同様に夢の中で益昌・劍閣にも行く。時には、彼の夢の世界は更に南鄭の周辺から限りなく拡大し、西は平涼府、東は榆関にまで及ぶ。要するに、彼は自分が軍馬にまたがり、敵陣を踏み越えて、北方の失地を奪回することを夢に見るのである。陸游の夢の世界は、まさに彼のロマン主義と現実主義の結合であり、陸游の一大特色となつている。彼の詩稿には、この世界の中で発せられた歓声が満ちあふれている。若干の凱歌も、やはり同様の情緒の下で書かれたものである。

陸游は若い頃、岑参(七二五〜七七〇)の詩を非常に好み、「李白・杜甫の後には、ただ岑参一人あるのみ」と考えていた<sup>(19)</sup>。乾道九年(一一七三)、彼は嘉州で『岑参集』を刊刻しており、このことから、彼が岑参に傾倒していたことが知られる。なぜ陸游は、岑参の詩を愛したのか。なぜ陸游は、南鄭から呼び戻された後、数ヶ月の時間をかけて、急いで岑参の詩を刊刻しようとしたのか。これは、ただ単なる個人の趣味の問題ではない。

彼の心の奥深くに必ずや一つの思想があり、そこで彼を支えていたに違いない。

岑参は唐王朝が強盛な時期に生まれ、辺境で従軍し、不朽の詩篇を書いて祖国の強大さを賛美し、戦闘の意志を発揚した。彼の「輪台の歌」「白雪の歌」「走馬川行」「衛節度の赤驃馬の歌」などの詩は、いずれもあのように雄渾・堅固・豪放であり、これらはいずれも、陸游があこがれたものである。しかし、岑参が書いたのは現実の世界であるのに対し、陸游が書いたのは幻想の世界だった。これは、時代の悲しみである。岑参の「走馬川行」詩は、封常清が軍隊を率いて西に遠征するのを見送るものであり、この詩の中の、

匈奴草黄馬正肥 匈奴 草は黄に 馬 正に肥ゆ  
 金山西見煙塵飛 金山 西のかた煙塵の飛ぶを見  
 漢家大将西出師 漢家の大将 西に師を出だす〔出兵する〕

という三句は、国のために遠征し、勇敢に戦う一人の英雄の姿を人に示す。陸游も、「大将出師の歌」詩一首を書いている。

將軍北伐辭前殿 將軍 北伐せんとして前殿〔正殿の前にある御殿〕を辭し  
 恩詔催排苑中宴 恩詔もて催排す 苑中の宴〔御苑での〕

紫陌驚塵中使来	酒宴〔紫陌〕塵を驚かして 中使〔内密の勅使〕来たり
青門立馬群公餞	青門〔馬を立てて〕 群公〔大臣たち〕 餞す〔餞別する〕
續旗雜沓三十里	續旗〔雑沓〔込み合う〕〕 三十里
画鼓敲鏗五千里	画鼓〔敲鏗〔打ち鳴らす〕〕 五千里
行營暮宿咸陽原	行營 暮に宿す 咸陽〔陝西省〕の原
滿朝太息傾都羨	滿朝 太息し 都を傾けて羨む
天声一震胡已亡	天声 一たび震えば 胡 已に亡び
捷書突突如飛電	捷書〔戦勝の報告書〕 突突として飛電のごとし
高秋不閉玉関城	高秋 閉ざさず 玉関〔玉門関〕の城
中夜罷伝青海箭	中夜 伝うるを罷む 青海の箭
可汗垂泣小王号	可汗〔えびすの酋長〕は垂泣し〔涙を流し〕 小王は号ぶ
不敢跳奔那敢戰	敢えて跳奔せず〔逃亡しない〕 那ぞ敢えて戦わん
山川図籍上有司	山川の図籍 有司〔係りの役人〕に上り
張掖酒泉開郡県	張掖〔甘肅省〕 酒泉〔同上〕 郡県を開く
還朝策勲兼将相	朝に還れば 勲〔勲功〕を策して 将

相〔將軍と宰相〕を兼ね  
 詔〔みことり〕して黄鉞〔黄金のまさかり〕を仮し 金鉞〔鼎の金の耳輪〕を調す  
 丈夫 未だ遇わざれば〔まだ不遇な間は〕 誰か知るを得んや  
 昔日 新豊〔陝西省〕 貧賤を笑う  
 〔『詩稿』 卷十一〕

この詩は「婕妤怨」詩と同じ時期に書かれたもので、同様の思想・感情から出たものである。婕妤が陸游の分身であると同様に、大将もまた陸游の分身であると言うことができる。淳熙十三年（一一八六）、陸游は任地の嚴州〔浙江省〕で「秋懷」詩〔『詩稿』 卷十八〕を書いている。その末尾の四句はまさしく、大軍を率いて出征したいという彼の願いを提示している。

平生 養氣頗自許 平生 氣を養いて 頗る自ら許す  
 雖老尚可吞幽并 老いたりと雖も 尚お幽并〔幽州と并州〕を吞むべし  
 何時擁馬橫戈去 何れの時か 馬を擁し 戈を横たえて去き  
 聊為君王護北平 聊か君王の為に北平〔北京〕を護らん

淳熙七年（一一八〇）、陸游五十六歳、江西提舉常平茶塩公

事<sup>じ</sup>在任中に次のような詩を書いて、彼の夢の世界を提示して  
る。

五月十一日夜<sup>まさ</sup>且に半ばならんとするとき、夢に大駕<sup>たいが</sup>の親征<sup>しんせい</sup>するに従い、<sup>せい</sup>尽く漢唐<sup>かんたう</sup>の故地<sup>こち</sup>を復す。城邑<sup>じやういふ</sup>、人物<sup>じんぶつ</sup>の繁麗<sup>はんれい</sup>なるを見る。云う、「西涼府<sup>せいりやうふ</sup>なり」と。喜ぶこと甚<sup>はなは</sup>たく、馬上<sup>ばじやう</sup>にて長句<sup>ちやうく</sup>を作るも、未だ篇<sup>へん</sup>を終えずして覚<sup>さ</sup>む。乃ち足<sup>すなわ</sup>して之<sup>これ</sup>を成<sup>な</sup>す<sup>(23)</sup>

天宝胡兵陷西京

天宝〔唐の玄宗の年号〕胡兵 西京

北庭安西無漢營

北庭〔新疆〕安西〔同上〕漢營〔中国

五百年間置不問

五百年間 置きて問わざるに

聖主下詔初親征

聖主〔孝宗〕詔を下して初めて親征

熊羆百万從纒駕

熊羆〔クマのように勇猛な兵士たち〕

故地不勞伝檄下

故地〔旧領土〕檄を伝うるを勞せずし

築城絶塞進新図

城を絶塞〔辺境のとりで〕に築きて新

排仗行宮宣大赦

仗〔儀仗〕を行宮に排べて大赦を宣す

岡巒極目漢山川  
文書初用淳熙年

岡巒 目を極む 漢の山川  
文書 初めて用う 淳熙〔孝宗の年

駕前六軍錯綿繡

駕前の六軍〔天子の軍隊〕綿繡を錯え

秋風鼓角声满天

秋風 鼓角 声 天に満つ

首蓓峰前尽亭障

首蓓峰〔甘肅省の山〕前 尽く亭障

平安火在交河上

平安火〔無事を伝えるのろし火〕は在

涼州女兒滿高樓

涼州〔甘肅省〕の女兒 高樓に満ち

梳頭已学京都樣

頭を梳るに 已に学ぶ 京都の樣

〔『詩稿』卷十二)

〔陣地〕

このような詩は、失地回復の願いがかなえられない時に、彼がこころした願望を夢の世界に託し、ただ夢の中でのみ彼の幻想を実現できたことを物語っている。  
夢は自覚的な行為ではないので、彼は時には幻想の実現をさらに酒に託した。酒の刺激によつて彼の思考はより一層奔放になり、時には彼に一種の興奮を与えることもできた。一例として、「醉歌」<sup>(24)</sup> 詩を次に示す。

往時一醉論斗石

往時 一たび酔えば斗石〔一斗一石の

坐人飲水不能敵  
 横戈擊劍未足豪  
 落筆縱橫風雨疾  
 雪中会獵南山下  
 清曉嶙峋玉千尺  
 道边狐兔何曾問  
 馳過西村尋虎跡  
 貂裘半脫馬如龍  
 拳鞭指麾氣吐虹  
 不須分弓守近塞  
 伝檄可使腥羶空  
 小胡逋誅六十載  
 信谿獅子勢已窮

酒」を論じ  
 坐人 水を飲みて 敵する能わす  
 戈を横たえ 劍を撃つは 未だ豪とす  
 るに足らず  
 筆を落とせば 縦横 風雨のごとく疾  
 し  
 雪中 会獵す〔集まって狩をする〕南  
 山の下  
 清曉 嶙峋たり〔いかめしくそびえ  
 るさま〕玉 千尺  
 道边の狐兔 何ぞ曾て問わん  
 西村を馳せ過ぎて 虎の跡を尋ぬ  
 貂裘〔テンの皮衣〕半ば脱して 馬  
 龍のごとく  
 鞭を挙げて指麾〔指揮〕すれば 氣  
 虹を吐く  
 須いず 分弓して〔部隊を分けて〕  
 近塞を守るを  
 檄を伝えれば 腥羶〔なまぐさいえび  
 す〕をして空しからしむべし  
 小胡 誅を連るること六十載  
 信谿たる獅子〔吠え立てる狂犬のよう  
 な輩〕勢い已に窮す

聖朝好生貸孳戮  
 還爾旧穴遼天東  
 〔詩稿〕卷十四  
 時には、陸游はまた一幅の絵画に托して彼の勝利への渴望を  
 表現し、自身の満足を求めたこともできた。一例として、「運  
 糧凶〔食糧運搬の凶〕を觀る」詩を次に示す。  
 聖朝 生を好み 孳戮を貸やかにす  
 〔刑罰を緩和する〕  
 爾を遼天の東の旧穴に還さん  
 王師北伐如宣王  
 風馳電擊復土疆  
 中軍歌舞入洛陽  
 前軍已渡河流黃  
 馬声蕭蕭陣堂堂  
 直跨井陘登太行  
 壺漿箠食滿道傍  
 芻粟豈復煩車箱  
 王師 北伐すること〔周の〕宣王のご  
 とく  
 風のごとく馳せ 電のごとく撃ちて  
 土疆〔領土〕を復す  
 中軍〔三軍の中央の本陣〕の歌舞 洛  
 陽に入り  
 前軍 已に河流の黄なるを渡る  
 馬声 蕭蕭として〔ものさびしく〕陣  
 堂堂たり  
 直ちに井陘〔河北省の山〕を跨ぎて  
 太行〔山西省の山〕に登る  
 壺漿〔壺の飲み物〕箠食〔箱の飯〕  
 道傍に満つ  
 芻粟〔馬草と穀物〕豈に復た車箱を煩

不須絶漠追敗亡

わさんや  
絶漠ぜつぼくして〔沙漠を横断して〕敗亡〔敵

亦勿分兵取河湟

の敗残兵〕を追うを須もちいず  
亦た兵を分かちて河湟かこう〔甘肃省蘭州一

但令中夏歌時康

帯〕を取ること勿なかれ  
但だ中夏ちゅうか〔中国〕をして時康じこう〔天下

千年万年無餽糧

泰平〕を歌わしむれば  
千年万年 糧りやうを餽おくる〔食糧を輸送す  
る〕こと無からん

〔詩稿〕卷四十三

古楽府には「出塞の曲」「入塞の曲」詩があり、出征した兵士たちが勇敢に戦う様子と、凱歌を歌って国に帰還する様子とが、主に詠われている。ここには当然ある種の誇張があるが、大部分は戦争と関係があり、誇張は一種の付加的な部分に過ぎない。陸游は南鄭の前線に行ったことはあるが、実際の戦闘には接したことがなかったので、彼が書いたこの種の詩、たとえば『詩稿』卷八の「出塞の曲」<sup>(26)</sup>詩、卷十四の「軍中雜歌」<sup>(27)</sup>詩、卷十五の「出塞の曲」<sup>(28)</sup>詩、卷二十の「塞上の曲」<sup>(29)</sup>詩、卷二十八の「小出塞曲」<sup>(30)</sup>詩などは、いずれも一種の願望を詠い、願望の中で満足を追求しようとしている。彼の「軍中雜歌」詩は、大変生き生きと書かれている。

三受降城無壘城

三受降城さんじゆうこうじやうは無壘むらい〔防壁がない〕の城

賊来殺尽始還營

賊 来たれば 殺し尽くして始めて營かえに還る

漠南漠北静如掃

漠南 漠北〔沙漠の南も北も〕静かなること掃けるがごとし

清夜不聞胡馬声

清夜 胡馬の声を聞かず

秦人万里築長城

秦人 万里に長城を築くとも  
如かず 壮士の北平を守るに

晓来磧中雪一丈

晓来 磧中〔沙漠の中〕雪 一丈  
羶腥ぜんせい〔なまぐさいにおい〕を洗い尽くして 春草 生ず

洗尽羶腥春草生

匈奴莫復倚長戈

匈奴莫復倚長戈

匈奴 復た長戈〔長いほこ〕に倚よる〔たよりにする〕莫かれ

来款軍門早乞和

来たりて軍門を款たき 早く和を乞うべし

鉄騎如山尚可避

鉄騎 山のごときは 尚お避くべきも

飛將軍來汝奈何

飛將軍〔漢の李広〕来たれば 汝を奈何いかんせん

名王金冠玉蹀躞

名王〔匈奴の名だたる王〕金冠 玉

面縛羸下声呱呱

蹀躞〔帯の上の飾り〕

羸下〔軍旗の下〕に面縛されて〔後ろ手に縛られて〕声 呱呱たり〔赤ん坊が泣くような声を出している〕

藁街未遽要汝首

藁街〔漢代の長安の街名で、罪人をさらし首にした場所〕未だ遽かに汝の首を要めず

売与酒家鉗作奴

酒家に売り与え 鉗して〔首かせをして〕奴と作さん

三月未春氷塞川

三月 未だ春ならずして 氷 川を塞

冬月苦寒雪暗天

冬月のごとく苦だ寒く 雪 天を暗くす

紫髯將軍曉射虎

紫髯の將軍 曉に虎を射れば

嚇殺胡兒箭似椽

胡兒を嚇殺して〔ひどく驚かせて〕箭 椽に似たり

北面行台号令新

北面の行台〔北方の軍事を司る役所〕号令 新たなり

繡旗豹尾渡河津

繡旗〔ぬいとりのある軍旗〕豹尾〔豹の尾の飾り〕 河津〔黄河の渡し場〕を渡る

檄書纒下降書至

檄書 纒かに下れば 降書〔降伏の文書〕至る

不用児郎打女真

用いず 児郎の女真を打つを

漁陽女兒美如花

漁陽〔河北省〕の女兒 美しきこと花のごとし

春風樓上学琵琶

春風の樓上に琵琶を学ぶ

如今便死知無恨

如今 便ち〔すぐに〕死するとも 知る 恨み無きを

不属番家属漢家

番家〔外国〕に属せずして 漢家〔中国〕に属すればなり

北庭茫茫秋草枯

北庭〔新疆〕茫茫として 秋草 枯る

正東方里是皇都

正東 万里は 是れ皇都〔帝都〕なり

征人樓上看太白

征人 樓上にて太白〔金星〕を看

思婦城南迎紫姑

思婦 城南にて紫姑〔廁の神。吉凶を尋ねる〕を迎う

淳熙十一年（一一八四）には、陸游は「虜酋〔えびすの酋長〕の漠北に遁れ帰るを聞く」詩（『詩稿』巻十六）と「虜政衰乱して掃蕩するに期有りと聞き、喜びて口号を成す」詩（同前）を書いてゐる。翌年書かれた「秋夜 舟を亭山の下に泊す」詩（『詩稿』巻十七）の自注には「虜酋の行帳 壯士の攻むる所と為

り、幾んど免れざると聞く」とあり、また「秋に感ず」詩(同前)の自注には「時に虜酋 香山淀より秋山に入ると聞く。蓋し遠く遁れたるならん」とある。紹熙二年(一一九二)には「虜の乱を聞く」詩(『詩稿』卷二十二)が書かれ、嘉泰四年(一一二〇四)には「虜の乱るるを聞きて華山の隱者に代わりて作る」詩(『詩稿』卷五十六)が、同年にはまた「虜の乱を聞きて前輩の韻に次す」詩(『詩稿』卷五十七)が、それぞれ書かれている。これらはいずれも、陸游が勝利への渴望を詠った詩である。嘉泰四年にこれら二首を創作した時に、宋の統治者はすでに敵と戦うことを決定していたので、陸游はより一層意気盛んとなった。

開禧二年(一一二〇六)の秋、戦いはすでに始められ、少しばかりの勝利を経た後、戦局の進展は南宋にとって非常に不利となった。しかし、宋軍が勝利したという流言蜚語は、それでも続けざまに届けられ、陸游の奔放な情熱を刺激した。彼は、「書几〔文机〕にて筆を試す」詩(『詩稿』卷三十八)を書いている。

……

……

解梁已報偏師入

解梁〔山西省の城の名〕已に報ず

上谷方看大盗除

偏師〔軍隊の一部隊〕の入るを  
上谷〔河北省の地名〕方に見る 大

葉笈箸囊幸無恙

盗〔大泥棒〕の除かるるを  
葉笈〔葉を入れる箱〕箸囊〔箸を入れる袋〕幸いに恙無し

蓮峰吾亦喜吾廬

蓮峰〔蓮華峰。華山の別名〕に吾も亦た吾が廬を喜かん

自注「偶たま、西師の関中の郡県を復すと報せらるる。昔、

予常に条華〔三条二華。後出〕に居をトせんとの意有り、因りて之に及ぶ」

〔『詩稿』卷六十九〕

同卷にはまた、「西師 華州〔陝西省〕を復すと聞く」二首がある。

西師駟上破番書

西師〔西方への遠征軍〕駟して〔早馬で〕上る 破番の書

鄠杜真成可卜居

鄠杜〔長安附近の地名〕真成に 居をトすべし

細肋臥沙非望及

細肋臥沙〔北方産の羊の一種で、肉が美味〕望み及ぶに非ず

且炊黍飯食河魚

且く黍飯を炊いて 河魚を食わん

青銅三百飲旗亭

青銅〔銅錢〕三百 旗亭〔酒樓〕に飲

関路騎驢半醉醒

関路 驢に騎りて酔醒を半ばす

双鷺斜飛敷水緑

双鷺 斜めに飛びて 敷水〔陝西省の川〕緑に



孤雲横度華山青 孤雲 横さまに度りて 華山〔陝西省

の山〕青し

戦いは不利であり、南宋はまさに和議の再開を摸索している所だったが、八十二歳の詩人は相変わらずこんなにも樂觀的であり、関中の奪回を渴望し、みずから三条〔北条山・中条山・南条山〕二華〔太華山・少華山〕の景色を見に出かける準備をしているのである。

## 〔訳者補注〕

(1) 『鶴林玉露』卷四 甲編「陸放翁」／陸務観、農師之孫、有詩名。寿皇嘗謂周益公曰、「今世詩人亦有如李太白者乎」。益公因薦務観、由是擢用、賜出身為南宮舍人。

(2) 『老学庵筆記』卷六／……蓋白識度甚淺、觀其詩中如、「中宵出飲三百杯、明朝掃掃二千石」、「揄揚九重万乘主、謔浪赤墀金鎖賢」、「王公大人借顏色、金章紫綬來相趨」、「別蹉跎朝市間、青雲之交不可攀」、「晁來入咸陽、談笑皆王公」、「高冠佩雄劍、長揖韓荊州」之類、淺陋有索客之風。集中此等語至多、世俱以其詞豪俊動人、故不深考耳。又如以布衣得「翰林供奉、此何足道、遂云、「當時笑我微賤者、却來請謁為交親。宜其終身坎壈也。

(3) 「池上醉歌」／七言古詩。淳熙元年三月、於蜀州。『校注』第一冊、三九四頁。

(4) 「醉眠曲」／七言古詩。淳熙八年十月、於山陰。『校注』第三冊、一〇

八五頁。

(5) 「神君歌」／雜言古詩。淳熙元年夏、於蜀州。『校注』第一冊、四二二頁。

(6) 「夢遊天姥吟留別」／雜言古詩。『李白集校注』(一九九八年二月、上海古籍出版社)卷一五、第二冊八九八頁。『全唐詩』卷一七四。「朝名山」、「李白集校注」は「訪名山」に作るが、ここでは朱東潤氏の原文の表記に従う。

(7) 「安期篇」／五言古詩。淳熙十一年秋、於山陰。『校注』第三冊、一二八〇頁。

(8) 「崑崙行」／七言古詩。淳熙十一年秋、於山陰。『校注』第三冊、一二九四頁。

(9) 「五月二十三夜記夢」／七言古詩。慶元元年夏、於山陰。『校注』第四冊、二二六五頁。

(10) 「春愁曲 客話成都、戲作」／七言古詩。淳熙元年正月、於嘉州。『校注』第一冊、三八八頁。

(11) 「後春愁曲 并序 予在成都作春愁曲、頗為人所伝。偶見旧稿悵然有感、作後春愁曲」／七言古詩。淳熙十年九月、於山陰。『校注』第三冊、一一〇〇頁。「此生」、「校注」は「此身」に作るが、ここでは朱東潤氏の原文の表記に従う。

(12) 「書志」／五言古詩。慶元三年春、於山陰。『校注』第五冊、二二一〇頁。

(13) 「言懷」／五言古詩。乾道九年冬、於嘉州。『校注』第一冊、三六一頁。

(14) 「長門怨」、「長信宮詞」、「銅雀妓」／「長門怨」は五言古詩、「長信宮詞」は騷体、「銅雀妓」は七言古詩。いずれも乾道九年十月〜十一月、於嘉州。『校注』第一冊、三六九〜三七〇頁。

(15) 「長門怨」／七言古詩。淳熙十三年春、於山陰。『校注』第三冊、一三六三頁。

(16) 「妾命薄」／七言古詩。淳熙十四年冬、於嚴州。『校注』第三冊、一五〇五頁。

(17) 「婕妤怨」／五言古詩。淳熙六年六月、於建安。『校注』第二

- 冊、八八八頁。
- (18) 『甌北詩話』卷六／即如紀夢詩、核計全集、共九十九首。人生安得有如許夢。此必有詩無題、遂托之於夢耳。
- (19) 『渭南文集』卷二十六「跋岑嘉州詩集」／予自少時、絶好岑嘉州詩。……嘗以為太白子美之後、一人而已。
- (20) 「輪台歌」「白雪歌」「走馬川行」「衛節度赤驃馬歌」／正式の詩題は、それぞれ「輪台歌奉送封大夫出師西征」「白雪歌送武判官歸京」「走馬川行奉送出師西征」「衛節度赤驃馬歌」。いずれも七言古詩で、『全唐詩』卷一九九所収。『岑參詩集編年箋註』(一九九五年十一月、巴蜀書社)では、順に、三二〇頁、三三五頁、三〇五頁、四七六頁。
- (21) 「大將出師歌」／七言古詩。淳熙六年六月、於建安。『校注』第二冊、八八七頁。
- (22) 「秋懷」／七言古詩。淳熙十三年秋、於嚴州。『校注』第三冊、一三九六頁。
- (23) 「五月十一日夜且半、夢從大駕親征、尽復漢唐故地、見城邑人物繁麗、云西涼府也、喜甚、馬上作長句、未終篇而覺、乃足成之」／七言古詩。淳熙七年五月、於撫州。『校注』第二冊、九七〇頁。
- (24) 「醉歌」／七言古詩。淳熙九年八月、於山陰。『校注』第三冊、一一三四頁。
- (25) 「觀運糧囿」／七言古詩。慶元六年春、於山陰。『校注』第五冊、二六七〇頁。
- (26) 「出塞曲」／七言古詩。淳熙四年正月、於成都。『校注』第二冊、六二四頁。
- (27) 「軍中雜歌」／七言絕句。八首連作。淳熙十年五月、於山陰。『校注』第三冊、一一五八頁。
- (28) 「出塞曲」／雜言古詩。淳熙十年九月、於山陰。『校注』第三冊、一一〇五頁。
- (29) 「塞上曲」／七言絕句。四首連作。淳熙十五年秋、於山陰。『校注』第三冊、一五五二頁。
- (30) 「小出塞曲」／五言律詩。紹熙四年冬、於山陰。『校注』第四冊、一九四五頁。
- (31) 「聞虜酋遁歸漠北」／七言古詩。淳熙十一年四月、於山陰。『校注』第三冊、一二七〇頁。
- (32) 「聞虜政衰亂掃蕩有期喜成口号」／七言律詩。二首連作。淳熙十一年秋、於山陰。『校注』第三冊、一二八五頁。
- (33) 「秋夜泊舟亭山下」／七言律詩。淳熙十二年秋、於山陰。『校注』第三冊、一三二二頁。自注「聞虜酋行帳為壯士所攻、幾不免」。
- (34) 「感秋」／五言古詩。淳熙十二年秋、於山陰。『校注』第三冊、一三三四頁。自注「時聞虜酋自香山旋入秋山、蓋遠遁矣」。
- (35) 「聞虜亂」／五言律詩。紹熙二年春、於山陰。『校注』第四冊、一六四四頁。
- (36) 「聞虜亂代華山隱者作」／七言律詩。嘉泰四年春、於山陰。『校注』第六冊、三三八三頁。
- (37) 「聞虜亂次前輩韻」／五言古詩。嘉泰四年夏、於山陰。『校注』第六冊、三三三〇頁。
- (38) 「書几試筆」／七言律詩。開禧二年冬、於山陰。『校注』第七冊、三八四八頁。自注「偶見報西師復闕中郡鼎、昔予常有卜居条華意、因及之」。
- (39) 「聞西師復華州」／七言絕句。二首連作。開禧二年冬、於山陰。『校注』第七冊、三八五三頁。